

唇歯音 [f] をめぐる随想

中村雅之

1. [f] に会う

音声としての [f] を少し真剣に意識するようになったのは、高校時代のことだった。これには二つの事件(?) がきっかけになった。一つは、高校1年の時の英語の試験で、「whether」と「feather」の発音が同じかどうか、という問題があった。もちろん発音は違う訳だが、ある友人が「両方とも“フェザー”じゃないか。なんで違うんだ？」と異議を申し立てた。この異議に、私は大いなる興味を覚えた。彼にとっては振り仮名は発音記号に等しいから、双方が同じ振り仮名で表記されるからには、発音も同じであるはずだ、という非常に筋の通った(?) 意見であった。英語としては全く異なる [hwe] と [fe] がカタカナにすると共に「フェ」となりうることの面白さに改めて気付かされたのである。

二つめは、テレビでスペイン語講座を見ていた時のこと。「ありがとう」という表現のスペイン語を聞いた時、初め [grafias] と私の耳には聞こえた。しばらくして綴りを見ると、「Gracias.」とある。「ci」がどうして「fi」に聞こえるのか、疑問に思っていると、講師の説明があって、スペイン本国では「ci」は英語の「think」の「thi」の発音だということらしい。どうやら私は [θi] を [fi] と聞き誤ったということらしい。

以上の2つの出来事によって、[f] とそれに関連する音声に、知らず知らず、興味が向くことになった。以下に述べるのは、[f] をめぐるとりとめのない随想である。

2. 日本語の「フ」

英語や中国語の「f」は、無声の唇歯摩擦音である。分解すれば、①無声音、②歯音、③唇音、④摩擦音、という4つの特徴からなる。日本語の「フ」は無声の両唇摩擦音であるから、英語や中国語の「f」とは②を除く3つの特徴が共通することになる。したがって、「film」を「フィルム」、「fan」を「ファン」と表記するのはごく自然なことと言ってよい。また、高校生の私が [θi] を [fi] と聞き誤ったのは、[θ] が①②④の特徴を有しており、[f] とよく似た聴覚印象を持っていたからである。

ところで、「フィルム」は [Φ i r u m u] と発音される他に、[Φ u i r u m u] と発音される。同様に「ファン」は [Φan] と [Φuan] と発音される。これは [Φu] が固有の日本語(和語)の語彙としても普通の発音であるのに対して、[Φa] や [Φi] が(現代日本語では)外来語にしか現れないことによる。ハ行音を/h/と表記するならば、/hu/[Φu] は普通の音であるが、/hwa/[Φa] や/hwi/[Φi] は一定の努力を要する音だということになる。駅の「ホーム」が、予想される音形「フォーム」(<プラットフォーム/platform)でないのも、同様であろう。

3. キリル文字の「Ф」と朝鮮語の [p<sup>h</sup>]

ロシア語などの表記に用いられるキリル文字では [f] 音を表す文字は「Ф」である。この文字はギリシア文字「Φ」に由来する。ギリシア語は元来 [f] 音を持たず、したがって、それを表す文字もなかった。しかし帯気音 [p<sup>h</sup>] (すわわちギリシア文字「Φ」) が

[f]へと変化したため、後期のギリシア語では「Φ」が[f]を表すことになり、それを襲ったキリル文字でも、同じ文字で[f]を表記することになった。[p<sup>h</sup>]の音声特徴は、「無声」「唇音」「帯気」であるが、その「帯気」性が[f]の「摩擦」性と類似の特徴(すなわち強い息を出すという特徴)を持っている。

現代朝鮮語で、「film」を[p<sup>h</sup>illum]、「France」を[p<sup>h</sup>urajsu]と言うように、外来語の[f]を、やはり無声帯気音(朝鮮語学にいう激音)の[p<sup>h</sup>]で表すのも、[f]と[p<sup>h</sup>]に類似性を見出しているからであろう。一方、日本語の「フ」に対して、[p<sup>h</sup>u]ではなく、[hu]をあてるのは、一見当然のようでありながら、英語の[f]と日本語の「Φ」を全く別の音として捉えている訳であるから、なかなか面白い。

#### 4. ラテン文字の「F」

ラテン文字はギリシア文字に由来する。厳密に言えば、エトルリア語を仲介者としてギリシア文字を取り入れたのである。ラテン文字の「F」は、ギリシア語で[w]を表す文字「F」(ディガンマ)に由来する。はじめエトルリア人は、ギリシア語にない[f]音を表すのに、[w]を表す文字「F」と、[h]を表す文字「日」を組み合わせた「F日」という表記を考案した。初期のラテン語でもこれを踏襲して「FH」という表記によって[f]音を表したが、やがて「H」を省いて「F」のみで表記することになった。

初期のエトルリア語およびラテン語の表記では{w+h}によって[f]を表したのであるが、これは[f]の「唇音」性を{w}によって示し、「無声」「摩擦」を{h}によって示したものと解釈できる。

これに関連して興味深いのは、かつてラテン語の最古の資料と目されていた「黄金の留め金」の銘文である。19世紀後半にローマ南東の都市で発見されたこの資料には、右から左へ「MANIOS:MED:FHE:FHAKED:NUMASIOI」と刻まれていた。古典期ラテン語に翻訳すれば、「Manius me fecit Numerio.(マニウスが私をヌメリウスのために作った)」となる。当初は紀元前7世紀のものとして、ラテン語最古の資料とされたが、1970年代に偽造説が浮上した。実のところ偽造という確たる証拠はなさそうであるが、最近では研究者の多数が偽造説に傾いているという。しかし、この銘文があまりにも古風で、偽造だとすると、よほどの言語学的知識を持った者のしわざということになる。なかでもfacio(作る)の完了形に重複形(fhe-fhaked)が用いられていることと、[f]が「FH」という綴りで記されることが、注意を引く。偽造であるとすれば、完了形を重複形で記すには比較言語学の知識が必要であるし、[f]を「FH」と記すには古代の表記法を熟知していなければならないのである。(cf.風間喜代三「解説の真と偽」『言語』1996年8月号。および小林標『ラテン語の世界』pp.46-48、中公新書、2006年2月)

#### 5. チベット文字漢語およびパスパ文字漢語の「f」

9~10世紀頃の敦煌資料の中には、チベット文字で漢語を記した資料が多く存在するが、そこでは漢語の[f]は、「h」と半母音「w」の組み合わせで表記されている。チベット文字に基づいて考案された13世紀のパスパ文字においても、全く同様に「h」と半母音「ü」の組み合わせで、漢語の[f]を表記する。

チベット文字およびパスパ文字における[f]の表記法は、ちょうど初期のラテン語に

おける表記法と同じく、「無声」「摩擦」の「h」と、「唇音」性を示す要素（転写上はチベット文字「w」、パスパ文字「ü」であるが、両者は字形においても用法においても同じもの）を組み合わせたものである。ただし、漢語には/fan/と/huan/のような、/f-/と/hu-/の対立があるが、チベット文字およびパスパ文字では、その区別はなされない。/fan/と/huan/はともに、チベット文字「hwan」、パスパ文字「hüan」と転写される綴りで表記されることになる。パスパ文字においては、/f-/と/hu-/の区別があるという主張もあるが、少なくとも明瞭な形では確認されない。

ところで、チベット文字とパスパ文字が同様の方法によって[f]音を表記しているのは、パスパ文字がチベット文字の字形と綴字法と模倣したことを考えれば、当然のことと言えるのであるが、一つだけ考慮しておくべき事情がある。チベット文字による漢語表記では、新たな文字を作り出すことなしに、チベット語を表記する文字だけで漢語を表記しようとした結果、漢語の[f]を「hw-」と表記するのが適当と判断されたのであるが、パスパ文字はそうではない。パスパ文字ではいくつか新たな字形（チベット文字にない字形）を考案しているのであるから、[f]に対しても、専用の文字を作ることが可能だったのではないかと考えられるのである。しかし、結局そのような措置はなされなかった。その理由は以下のようなことであろう。

パスパ文字は、まずモンゴル語を表記するための文字を作成し、その次に、それを基にして、漢語を表記するための文字を整えた。それが最も顕著に表れているのは、漢語の無声帯気音[p<sup>h</sup>]が、チベット文字の[p<sup>h</sup>]からではなく、モンゴル語[b]を表す文字を変形して新たに作られたことである。モンゴル語では唇音に有声の[b]のみがあり、無声の[p]がなかった。もし[p]があれば、それには[p<sup>h</sup>]を表すチベット文字が用いられていたはずであった。すなわち、漢語のパスパ文字表記を整える際に、参考にできる唇音の文字はモンゴル語の有声音[b]を表す文字しかなかった。漢語ではまずその文字を無声無気音[p]を表す文字として用いることにし、無声帯気音[p<sup>h</sup>]に対しては、その文字を変形して新たな文字を作った訳である。このような状況であったから、もし[f]に対して新たな文字を作ろうとしても、その基になる文字が見当たらなかったであろう。仮にいずれかの文字を変形して新たに[f]を表す文字を作ろうとした場合、最も有力な候補はキリル文字や朝鮮語の表記を参考にすれば、無声帯気音[p<sup>h</sup>]を表す文字であったはずである。しかし実際には、その文字は、材料となるべきモンゴル語用のパスパ文字の中にはなかった。したがって、[f]に対する新たな文字の作成は断念され、結局チベット文字において行われていた綴字法を採用せざるを得なかったのである。

そのような面倒なことを考えずに、パスパ文字漢語の[f]は初めからチベット文字の綴字法「hw-」を取り入れたと考えてもよさそうに思われるが、おそらくそうではない。実はパスパ文字漢語においては、濁音の系列にチベット文字の無気音の系列を採用しているのであるが、これは最終段階でなされたと考えられる。もしもパスパ文字漢語表記作成の最初の段階でチベット文字を参考にしたのであれば、当然漢語[p<sup>h</sup>]に対しても、[p<sup>h</sup>]を表すチベット文字が採用されていなければならないし、それ以上に、漢語の無声無気にチベット語の無声無気が当てられていなければならないであろう。パスパ文字漢語表記は、まずパスパ文字モンゴル語表記を参考にして作られ、その後の段階で、チベット文字を参考したのであり、[f]の表記もその際に取り入れられたと見なすべきであろう。